

連載 39 『土と兵隊』 ルポルタージュの困難、戦争の困難

火野葦^{あしへい}平原^{た さかもと たか}原作、田坂具隆監督『土と兵隊』（1939年）は、日中戦争時の1937年11月に行われた杭州湾敵前上陸作戦を描いた作品である。主演は小杉^{いさむ}勇。

『キネマ旬報』1939年12月1日号の日本映画批評によれば、興行価値は次のとおり。

興行価値——絶大。火野葦平の「土と兵隊」を田坂（具隆監督・引用者注）と小杉（勇・引用者注）以下のスタッフで映画化した事による観客の信頼感と共に、封切に於ても一ヶ月ロングでしかも尻上りの様を呈した。

火野葦平（1907－1960年）は、『糞尿譚』（1938年）で芥川賞を受賞、小林秀雄が杭州で出征中の火野に賞を渡した。その後、火野は陸軍報道部に転属となる。『麦と兵隊』（1938年）、『土と兵隊』（1938年）、『花と兵隊』（1939年）は「兵隊三部作」と呼ばれ、火野自身も「兵隊作家」ともてはやされた。そのベストセラー小説の映画化である。

だがそれに対して『キネマ旬報』誌は、諸手を挙げて称賛したわけではない。

北林透馬が寄稿した「映画の虚構性——「土と兵隊」の小杉君に」（『キネマ旬報』1939年11月21日号）には次のようにある。

火野文学の特異性は、そのルポルタージュ性にある、と言つても好いかも知れないのだが、この特異性が或る意味では、火野文学にとってフェータルなものである、と言ふことが出来る。（略）

火野氏が兵隊であり、その火野氏が現実を経験した戦場生活の記録は、矢張り記録であつて文学では無い、と言ふことは、火野氏自身がその作品の前書きに断つてあるとほりだが、従つて、火野文学のアピールは、文学的アピールよりも、むしろ実話的アピールなのだ、と言ひきつてしまふことは少々言ひすぎであらうか。

戦争文学のルポルタージュ性については、日中戦争時の論壇で議論的であった。そして戦争映画のルポ



『土と兵隊』（1939）
『キネマ旬報』1939年6月1日号所載

ルタージュ性については、ある意味で逆転構造があったことを、座談会「「土と兵隊」合評」（『キネマ旬報』1939年10月21日号）が伝えている。

そもそも映画『土と兵隊』は、後半にトーチカの争奪戦などの戦闘シーンがあるが、前半は延々と続く行軍また行軍の画像である。日中戦争で日本軍は点と線しか攻略できなかったという言説を、体現するような映像なのである。中国からの留学生たちと鑑賞した際に、「中国の戦争映画、抗日映画の画像、ドラマ、発想とまったく異なる。戦争中に日本人がこういう映画をつくって観ていたというのが意外だ」という声が上がった。映画のなかでは、実際の兵士の行軍のカットと、小杉勇をはじめ日活から中国ロケに参加した俳優たちのカットとが組み合わされている。そこにねじれがある。

水町青磁は次のように指摘している。「報告文学の形式と映画との違ひといふ所がむづかしいね。文学だつたら、兵隊のありのまゝの姿を、書けるが、カメラの方では向けるとトタンにしやんとしちやふ。本当の兵隊だから、つい、しやんとしまふのだらうが、現地で本ものを映すことの効果が却つて逆になつてしまふ場合だつて、随分あつただらうね。その点映画はむづかしい」。これに対して清水千代太は「カメラになれた俳優でないから、カメラ・コンシヤスにどうしてもなるね」と応じている。

ここに読み取れるのは、戦争の報告文学を映画にすることの困難と、戦争映画における本物とは何かという大きな疑問である。